札幌医科大学　医療人育成センター紀要　43～54（2010）　原著論文

可能構文の文法範疇について

山口和彦
札幌医科大学医療人育成センター　教養教育部門英語教室

On the Grammatical Categories of Capability-constructions

Kazuhiko YAMAGUCHI
English Division, Medical Education Center, Sapporo Medical University

欧米の言語学ではヨーロッパの言語（特に英語やドイツ語）をもとに可能構文はもっぱらモダリティの一部として分析されてきた。しかし、アジアの言語には受身や自発等のいわゆるヴォイスと共通形式で言語化される可能構文もある。東南アジアの言語には過去・完了等と共通形式で言語化される可能構文もある。パプア・ニューギニアの一部の言語には習慣相と共通形式で言語化されている可能構文もある。つまり可能構文は類型論的に見るとモダリティ、ヴォイス、テンス・アスペクトという様々な文法範疇にまたがる複雑な側面を持つ構文なのであり、決して先験的に（a priori）どこかの文法範疇から分析すべき構文ではない。しかし、そもそも可能構文がどのような文法範疇とかかわっているかという類型論的研究が殆どないのが現状である。そこで本論文の目的はまず可能構文をモダリティ・ヴォイス・テンス・アスペクトにまたがる複合的な側面を持つ構文として捉え直し、そういった文法範疇がなぜ可能構文を生じさせるかという背後にある認知・機能的な動機を考察するものである。

1. はじめに

欧米の言語学ではヨーロッパの言語（特に英語やドイツ語）をもとに可能構文はもっぱらモダリティの一部として分析されてきた（Palmer[1], Bybee et al[2], van der Auwera and Plungian[3] 等）。しかし日本語（ラレル）、韓国語（jida）、ビルマ語、ベトナム語等には受身や自発等のヴォイスと共通形式で言語化される可能構文がある。また東南アジアの言語であるインドネシア語、カンボジア語等には過去・完了等と共通形式で言語化される可能構文もある。さらに、パプア・ニューギニアの一部の言語（例えば、Koiari 語）には習慣相と共通形式で言語化されている可能構文がある。つまり可能構文は類型論的に見るとモダリティ、ヴォイス、テンス・アスペクトという様々な文法範疇にまたがる複雑な側面を持つ構文なのであり、決して先験的に（a priori）どこかの文法範疇から分析すべき構文ではないと考える。しかし、そもそも可能構文がどのような文法範疇とかかわっているかという類型論的研究が殆どないのが現状である。そこで、本論文の目的はまず可能構文をモダリティ・ヴォイス・テンス・アスペクトにまたがる複合的な側面を持つ構文として捉え直し、そういった文法範疇がなぜ可能構文を生じさせるかという背後にある認知・機能的な動機を考察するものである。

2. 先行研究と基本的な仮定

可能構文は欧米を中心とする言語学では、モダリティの一部として分析されてきた（Palmer[1], Bybee et al[2], van der Auwera and Plungian[3] 等）。英語学では主に can についての記述的研究（Palmer[1], Leech[4], Collins[5], 小西[6]）と、can が示す「可能→可能性→許可」という文法化の説明（特に Sweetser[7]）や can の理論的考察（例えば、澤田[8]）がある。英語の包括的な文法書である Quirk et al[9], Huddleston and Pullum[10], Biber et al[11] 等でもその傾向は変わらず、もっぱらモダリティから記述がなされている。

一方、日本語学の研究の流れでは、可能構文がどの文法範疇に属するかということはあまり問われていないようである。主な研究にはラレルの研究（尾上[12,13], 川村[14]）、可能構文の記述的研究（小矢野[15-17]）、可能の条件の整備（渋谷[18,19]）等がある。細かいものも入れればかなりの数になり、活発に研究されている分野であると考えられる。また日本語のラレルによる可能構文は、結合価が対応する文と比べ一つ減ることから伝統的にはヴォイスとして分類されている（寺

村[20]、渋谷[18])。しかし可能構文をモダリティやヴォイスから離れて複合的な視点から研究したものはない。

本論文では特定の理論に基づいた分析はせず、広い意味での機能主義的類型論や認知言語学から分析を行う。特に Comrie, Givón, 柴谷 , Talmy, Langacker, Lakoff 等の一連の研究が本研究の理論的な背景である。

可能構文が具現化する「可能」という概念は我々の日常生活において必要不可欠な概念と考えられる。可能概念を何らかの形（具体的な形式や含意等）で表さない言語はないと思われ、どの言語にも多かれ少なかれ可能構文は存在するものと考えられる。例えば、Wierzbicka が提唱する Semantic Primes でも普遍的な概念の一つとして仮定されている。また、中国語の文献として残る最古の形態である甲骨文字の段階でも、他のいわゆるモダリティーの概念（義務や可能性等）は文字として存在していないが、可能を表す「克（ké ～できる）」だけは、この段階から存在している（張玉金[21]：1）。このように考えると、可能構文を欧米の言語学の支配的な考え方であるモダリティーの一部として分析することから一度離れ、可能構文自体を類型論的に考察することは非常に重要であると考える。同時に、はじめにで述べたように言語によって可能構文はモダリティーやヴォイスとして具現化される事実に焦点を当て、可能構文を広い視点から考察することも重要であると考える。

可能概念を具現化する可能構文は、どの言語にあると考えられても、その一方で可能概念の形式的な具現化は言語毎に異なっているという事実がある。例えば、Yimas 語 (1) のように接頭辞のもの、日本語 (2) のように接尾辞のもの、中国語 (3) のように助動詞のもの、ウルドゥー語 (4) のように受身構文で表すもの、Tahiti 語 (5) のように統語的構文で表わすものもある。このようなことから可能構文を形式的に定義することは現実的ではないと考えられるので、本論文では可能構文を意味的に定義する。詳しくは後で述べる。

(1) Yimas（Foley[22]:265）

ama ampara　kantk-nan　an-ka-na-ampu-nt-ra
1sg　firewood.V.pl　with-PBL　POT-1sg.A-DEF-cook-PRES-V.pl
"If I have firewood, I will be able to cook."

(2) 若いときはいくらでも寝られるものだ。

(3) 中国語（相原[23]：283）

tā　huì　shuō　Zhōngwén
he　huì　speak　Chinese
"He can speak Chinese."

(4) Urdu 語（Schmidt[24]：331）

mujh　sē　itnā　kām　nahĩ　ki-y-ā　jā-t-ā
me-obl　from　so-much　work　not　do-PFV-m.sg　go-IMPV-m.sg
"I can't possibly do so much work."

(5) Tahitian（Tyron[25]：98）

'e　nehenehe　tā'u　'e　pa'uma　'i　ni'a　'i　tēra　tumu　rā'au.
it.is　good　my　ART　climb.up　on　LOC　that　tree
"I can climb that tree."

次に、この論文の前提となる一つの重要な概念について考える。よく知られた事実であるが日本語のラレルには (6) に見るように「自発、受身、可能、尊敬」の 4 つの用法がある。

(6) a. 故郷が懐かしく思い出される。　（自発）
b. 五稜郭は江戸時代末期につくられた。　（受身）
c. このウニ丼はいくらでも食べられる。　（可能）
d. 先生は札幌を何時に出発されますか。　（尊敬）

こういった語彙の多義性に似ているが、多義が語彙ではない現象を指す適当な用語がないので、ここではこういった現象を「文法的多義」と仮に呼ぶことにし、文法的多義を「語彙に見られる多義のように多義性が複数の文法的意味（eg. 受身、自発、可能、尊敬）にまたがること」と定義する。ある可能構文がモダリティ概念と文法的多義を見せる時、その構文をモダリティ型と呼ぶことにする。同様に、受身等のヴォイス概念と文法的多義を見せる時には、ヴォイス型、テンス・アスペクト等の時間概念と文法的多義を示す時には、時間概念型と呼ぶことにする。

本論文では文法的多義を示さない可能構文は扱わない。例えば、英語の 'be able to' や日本語の「～することができる」は基本的に可能以外の文法的概念を表さないので本稿では扱わない。また、フランス語の 'connaître' は「知る」という動詞の意味と可能構文との多義を示すが、これも他の文法概念との多義（文法的多義）を示さないので本論文では扱わない。さらに、本論文ではある言語全体を例えばヴォイス型というような特徴付けは行わない。ある言語内のある可能構文だけを「X 型の可能構文」と呼ぶことにする。というのは、例えば日本語を考えてみてもラレルの可能構文はヴォイス型で、「～することができる」はもっぱら可能しか表さないからである。英語でも同様に 'can' はモダリティ型であるが、'be able to' は何型でもなく単なる可能概念を専門に言語化している可能構文である。

3. 可能の意味構造

前節で述べたように、可能概念を具現化する可能構文には様々な形式があり、形式に基づいて可能構文を定義することはおそらく出来ない。従って、本稿では意味的に可能構文を特徴づけることにする。本節では可能の意味構造を簡単に定義することにする。本稿の立場は類型論研究で一般に行われている立場と同じである。特に Shibatani[26] で述べられているように、ヴォイスの意味構造に構文の意味構造が合致すれば、それをヴォイスと見なすのと同じ立場である。従って本稿で提案する可能構文の意味構造に、ある構文の意味構造が合致する時、その構文を可能構文と見なす。この立場の利点は、対照研究にありがちな英語の‘can’に対応する表現のみを可能構文とみなし、きちんと可能概念の意味構造を定義せずに、単純に比較するということをしないことである。

次の文を考えてみよう。

(7) 鳩山選手は 100m を 9 秒ちょうどで走れる

この文の内容は「鳩山選手の内部にある潜在的な力が 100m を 9 秒で走る事態を起こさせる」と言い換えられる。つまり「ある要因（ここでは速く走る能力、時には風などの外的な条件）が内部に秘められた潜在的な力に働きかけ（引き金となってと同じこと）9 秒で走るという結果を引き起こす」ということである。これを図式的に描くと図 1 のようになる。

図1：可能の意味構造

図 1 が示していることは「Factor が Pent-up potency に対して働きかけ、ある種の結果（result）をある時に生み出す」ということである。ここでの Factor には生得・内在的能力、習得した能力、状況等が含まれる。この特徴付けは使役の意味構造を想起させる。概略的に言えば「causer が causee に働きかけなにかをさせる」という意味構造である（特に Shibatani[27]，Comrie [28]，Talmy [29]，Langacker [30, 31] 等を参照）。図 1 の特徴付けが正しいとすると可能概念の意味構造は幅広く研究されている使役の意味構造に似ているとも言える。この可能概念の意味構造を最も類象的（iconic）に言語化したのが (8) の英語の enable 構文と考えられる。

(8) His income enabled him to live in comfort.

この文は「彼の収入が彼に働きかけ、快適に生活するという結果を生み出している」というように言い換えることが出来るからである。

繰り返すと、本稿の立場はこの可能概念の意味構造に、ある構文の意味構造が合致する時その構文を可能構文と見なすという立場である。このような立場を取ると、ある言語内の可能構文の総体がはっきり分からないという批判があるかも知れない。しかし、可能構文自体も語彙と同様に一つのカテゴリーであり、中心的なものから周辺的なものまで段階的に存在しており、周辺的な事例は別のカテゴリーと隣接しているものと考えられる。例えば、英語では中心的な可能構文は‘can’や‘be able to’であり、次に‘be capable of’，‘it is possible for to do’と続き、やや周辺的なものは‘know how to do’，‘get to’であり、かなり周辺的なものは、‘succeed in’，‘manage to do’のように考えられる。これを図式的に書くと、図 2 のようになる。

図2：英語の可能構文のカテゴリー構造

つまり、英語の可能構文は中心的な‘can’，‘be able to’から周辺的な‘succeed in’，‘manage to do’に段階的に推移しているということである。これは認知言語学のカテゴリー観に合致していると考えられる。

4. 文法的多義から見た可能構文

本節では文法的多義から見た可能構文の類型論的な変異を実際に示すことにする。少なくとも可能構文は 3 つの大きな文法概念（モダリティ、ヴォイス、時間概念）と関係することを示す。

4.1 モダリティ型

モダリティは欧米の言語理論を学んだ者にとって、可能といえばモダリティを連想するように、可能構文とは一番関係が想起しやすい文法範疇と言える。というのは、基本的に欧米では可能構文はモダリティの枠組みの中で分析されて来たからであると考えられる。例えば、(9) の英語が典型的な例である。(9a) は能力を、(9b) は可能性を、(9c) は許可をそれぞれ表し、この多義性は広く知られている。

(9) a. I can ride a horse.
b. Lightning can be dangerous.
c. Can I smoke here?

しかし、類型論的にこういった多義性が常に見られるかと言えば、そうとは限らず、様々な多義のパターンが観察される。まず (10) のベトナム語の‘có thể’は、(10a) では可能を表し、(10b) では許可を表すが、可能性の意味はない。

(10) ベトナム語
a. Tôi có the nói tiếng Đức.
I có thể speak language German.
"I can speak German." (Le-Ba-Khanh[32] : 242)
b. Anh có thể xem bào.
you có thể read newspaper
"You can read a newspaper." (富田[33] : 158)

同じことは (11) の中国語の‘kěyǐ’(可以) にも当てはまり、可能 (11a) と許可 (11b) の意味を表し、可能性は表さない。逆に、(12) にあるように中国語の別の可能を表す‘huì’(会) では、可能 (12a) と可能性 (12b) を表し、許可は表さない。

(11) 中国語
a. rénlèi shì kěyǐ zhēngfú zìrán de.
humen:being SHI kěyǐ conquer nature DE
"Man can conquer nature." (Beijing wai guo yu xue yuan[34] : 388)
b. Zhèr keyi zhàoxiàng ma?
here keyi take:a:picture Q
"Can I take a picture here?" (守屋[35] : 35)

(12) a. Nǐ huì kāi qìchē ma?
you huì drive car Q
"Can you drive a car?" (守屋[35] : 35)
b. Kàn yàngzi, jīntīan huì xià yǔ.
see circumstance, today huì fall rain
"It looks likely to rain today." (守屋[35]: 35)

さらに、許可や可能性以外の多義も存在する。(13) のビルマ語の‘ya.’は、可能の意味 (13a) と義務の意味 (13b) で多義性を示す。

(13) ビルマ語 (加藤[36] : 145)
a. twe. ya. da wun: θa ba dɛ
meet ya. NMR be:glad polite REA
Lit. "To be able to meet is glad"
"It's nice to meet you."
b. caun: θwa: ya. me
school go ya. IRR
"(I) must go to school."

同様の多義は古典日本語の「ベシ」にも見られる。(14a) が可能の例であり、(14b) が義務の例である。

(14) a. 羽なければ空をも飛ぶべからず (方丈記)
「羽根がないので空を飛ぶこともできない」
b. もの一言言ひ置くべき事ありけり (竹取物語)
「一言言っておかなければならないことがあった」

また、古代中国語 (漢文) にもこの多義性は観察される。古代中国語の「能」(néng) は可能 (15a) と義務 (15b) を表す。面白いことに、現代中国語ではこの多義性は観察されない。

(15) 古代中国語 (漢文)
a. 此人尚**能**去官、我反不**能**去邪 (漢書)
「この人でさえ官をやめられるのに、私がかえってやめられないことがあろうか」
b. 宣父猶**能**畏後生 (李白)
「宣父 (孔子) でさえも後輩の力量をおそれなければならなかった」

ここまでを見ると、この可能と義務の多義性はアジアの言語にのみ見られるという印象を与えるが、(16) のように英語の‘be to’構文の多義の一部にも可能と義務の多義性が見られる。同様な構文はドイツ語やオランダ語にも観察される。

(16) a. You are to do as I tell you. (義務)
b. My briefcase was nowhere to be found. (可能)

さらに、フィンランド語の‘saada’にもこの多義は見られるので、アジアの地域的特徴とは言えないようである。

(17) フィンランド語 (Raija et al[37] :325)
a. en saa sitä tehdyksi
neg.v.1.sg saada it doing
"I can't bring myself to do it."
b. sain tehdä sen monta kertaa.
saada do it many time
"I had to do it several times."

ここまでをまとめると、可能構文は可能性と許可以外にも義務との多義性を示す。さらに可能、可能性、

許可が直線的に並んでいるのではなく、可能を中心に放射状に可能性、許可、義務と多義関係が成立しているということである。それ故に文法化においても英語で見られるような「可能→可能性→許可」という文法化は可能の文法化の一部にすぎないということになる。

4.2 ヴォイス型

このタイプは典型的には可能と受身が結びつくものである。Shibatani[27] 以来有名であるが、多くの言語でこの可能と受身が文法的多義を構成する。例えば、日本語のラレルは (18a) では受身を表し、(18b) では可能を表す。

(18) a. 孝明君はお母さんにみっちり叱られた。
b. そんな悪い癖は永久には続けられないよ。

韓国語にはいくつか受身を言語化する手段があるが、そのうち 'jita' は (19a) のように一方では受身を表し、(19b) のように他方では可能を表す。

(19) 韓国語 (a は Lee[38] : 295)

a. Namu kaji-e eolgul-i keulgeo-jeo-ss-ta.
tree branch-with face-NOM scratch-jita-PASS-DECL
"The face is scratched with the tree branch."

b. i bang-eseo ja-myeon jal ja-ji-nda
this room-in sleep-if well sleep-jita-DECL
"(I or You) can sleep well if (I or you) sleep in this room"

この受身と可能の文法的多義は東アジアの言語に限らず、東南アジアの言語にも見られる。例えば、ベトナム語の 'được' は (20a) では受身を表し、(20b) では可能を表している。

(20) ベトナム語 (富田[33] : 284, 242)

a. Tôi được (thầy giáo) khen.
I được (teacher) praise
"I was praised (by the teacher)."

b. Tôi nói được tiếng Việt.
I speak được language Vietnam.
"I can speak Vietnamese."

さらに、Shibatani[27] が指摘したように受身と可能の文法的多義は南アジアの言語でも多く見られる。例えば、(21) にあるようにヒンディー語では (21a) は受身を表し、(21b) は可能を表す。同様な文法的多義は同じ南アジアのグジャラティー語でも見られ、(22a) は受身を表し、(22b) は可能を表す。

(21) ヒンディー語 (Kachru[39] : 176)

a. prəsad devī ke samne rəkha jata hɛ.
offering.M goddess of.OBL front put.PERF.M.sg go.IMPF.M.sg 3rdP.PRES.sg
"The offerings are placed in front of the goddess."

b. reɳu se pətr likha jaega?
Renu.F by letter.M write.PERF.M.sg go.3rd.P.FUT.M.sg
"Will Renu be able to write the letter?"

(22) Gujarati 語 (Doctor[40])

a. marathi kam kəray che
I:INST work do:PASS:PRES.PART be
"The work is done by me."

b. Mohənthi jəvaśe
Mohan:INST go:PASS:FUT
"Mohan will be able to go."

他にカシミール (Kashmir) 語等のインド・アーリヤ語派の言語、同じ南アジアのムンダリ語 (ムンダ語族) (Osada[41] :91) でも同様な現象が指摘されている。つまり、受身と可能が文法的多義をなすのは、東アジア、東南アジア、南アジアと広範囲に渡っていることが分かる。

ヴォイス型のもう一つのパターンは可能と自発が文法的多義を構成するものである。日本語と韓国語では、先に述べたラレルと 'jita' は自発も表す。(23a) が日本語の例で、(24b) は韓国語の例である。

(23) a. 故郷が懐かしく思われる。

b. wenji na-neun i jeoja-ga karyeonhage
somehow I-TOP this woman-NOM pitifully
jeogyo-jyeo-ss-ta.
feel-jida-PAST-DECL
"I do not why, but the pity for this woman (naturally) comes into mind" (K121-22)

この可能と自発の文法的多義は、日本語のラレルと韓国語 'jida' のようにその形式が同時に受身と多義になる形式に限られている訳ではない。(24) にあるようにタガログ語の Actor-focus の前接時である 'maka-' は自発の読み (24a) と可能の読み (24b) を持つ[42]。

(24) タガログ語 (大上[43] : 25)

a. Nakapulot ako ng era sa kalsada.
maka-pick:up I linker money sa road
"I picked up money on the road unexpectedly."

b. Nakakasayaw siya ng lambada.
maka(redup.)-dance she linker lambada
"She can dance a lambada"

同様な可能と自発の文法的多義はインドネシア語の‘ter-’にも見られる。(25a) が自発で、(25b) が可能の読みである。

(25) インドネシア語（牛江[44]：80）

a. Kamusku terbawa oleh teman.
dictionary:my ter-carry by friend
“(My) friend brought away my dictionary mistakenly.”

b. cita-citanya itu akhirnya tercapai juga.
ideal.his that finally ter-realize also
“His ideal was able to be realized in the end.”

ここまでをまとめると、ヴォイス型には少なくとも3つのパターンが観察される。一つ目は日本語や韓国語のように、受身、自発、可能が文法的多義を示すパターン。二つ目はヒンディー語、グジャラティー語、ベトナム語のように、可能と受身が文法的多義を示すパターン。三つ目はタガログ語やインドネシア語のように、可能と自発が文法的多義を示すパターン。これらをまとめたのが (26) である。

(26) 受身— 自発— 可能　日本語、韓国語
受身———— 可能　ヒンディー語、グジャラティー語、ベトナム語
自発— 可能　タガログ語、インドネシア語

4.3 時間概念型

このタイプは可能と時間概念が文法的多義を示す。下位類としては、習慣相や不完了といった非限定的な時間概念と多義を示すものと、過去・完了と言った過去指向の時間概念と多義を示すものがある。

まずビルマ語の‘taʔ’は、(27a) のように可能を表す時と、(27b) のように習慣相を表す時がある。

(27) ビルマ語（加藤[36]：144, 123）

a. bǎmazǎga: pyɔ daʔ θa la:
Burmese speak daʔ REA Q
“Can you speak Burmese?”

b. thi: mǎ pa bɛ: θwa: daʔ tɛ
umbrella NEG bring NEG go daʔ REA
“(Someone) have the habit of going outside without an umbrella.”

この文法的多義関係はパプア・ニューギニアの言語であるKoiari語でも見られる。Koiari語では (28) にあるように、(28a) が可能を表し、(28b) が現在の習慣（Present Customary）を表している。

(28) Koiari語（Dutton[45]：25）

a. A-ne Motu=taha heduv-are-ne a ua?
you-<Q> Motu=in talk-CUST-<Q> you BE
“Can you speak (in) Motu?”

b. Vani nunuta-ge ahu moni=ni-ge ahu imiv-are-ro.
day all-<> he money=for-<> he beg-CUST-<>
“He's always begging for money.”

こういった習慣相との文法的多義は同じパプア・ニューギニアの言語であるImonda語（Seiler[46]：178）にも見られる。

さらに「太陽は東から昇る。水は100度で沸騰する」と言った真理等を表すトルコ語 (29) の超越時制でも可能の意味があることが指摘されている。

(29) トルコ語（勝田[47]：64）

Siz Türkçe konu-şur musunuz?
you Tuekish speak-Aor Q
「あなた（方）はトルコ語を話せますか？」

さらに、非限定的な時間概念を表す文法範疇としてはロシア語等に見られる不完了相があるが、この不完了相もロシア語では (30) のように可能を表すときがある。(31) は同じスラブ語派に属するポーランド語の例である。

(30) ロシア語（藤沼貴編[48]：195）

я свободно говорю по-китайски.
I freely speak in-Chinese
“I can speak Chinese freely.”

(31) ポーランド語（塚本[49]：100）

Dziecko już chodzi
child already walk
“The child can already walk.”

次に可能は過去・完了と言った過去指向の時間概念とも多義性を示す。カンボジア語では (32a) は可能で、(32b) は完了の意味である。

(32) カンボジア語（Jacob[50]：109）

a. khɲom thvỳ:ka: mùn ba:n
I work not BAAN
“I cannot work.”

b. khɲom ba:n sɔ:se: sɔmbot haəy
I BAAN write letter already
“I have written the letter already.”

同様な例はタイ語にも見られる。(33a) は可能の意味で、(33b) は過去（‘indicating past time’ Haas [51] :178）の意味である。

(33) タイ語（山田 [52] :202, 206）

a. pii thîi léeo dâi pai mɯaŋ thai tâŋ sǎam khráŋ
去年 dâi 行く タイ も 3 回
「去年は３回もタイに行きました」

b. rɔ́ɔŋ phleeŋ châat thai dâi
歌う 国歌 タイ dâi
「タイの国歌を歌えます」

さらに、インドネシア語でもこの文法的多義は見られる。(34a) は可能の意味で、(34b) は完了の意味である。

(34) インドネシア語（牛江 [44] : 80）

a. cita-citanya itu akhirnya tercapai juga.
ideal:his that finally ter-realize also
“His ideal was able to be realized in the end.”

b. Buku terbitan baru itu terjual habis.
book published new that ter-sell completely
“The newly published book has been sold out completely.”

この可能と過去・完了という文法的多義は同じ東南アジアでもカンボジア語（モンクメール語族）、タイ語（タイ・カダイ語族）、インドネシア語（オーストロネシア語族）と複数の語族に見られるのが興味深い。

ここまでをまとめると、時間概念型では、習慣相、不完了、超越時制といった非限定的な時間概念と多義を示すものと、過去・完了と言った過去指向の時間概念と多義を示すものとがある。

4.4 まとめ

ここまでをまとめるとその全体像は図 3 のようになる。まずモダリティ型であるが、可能は可能性、許可、義務と文法的な多義を示す。可能とこれらの概念の関係は直線的なものではなく、4.1 節で述べたように放射状なものであることが分かる。故に英語の‘can’に見られる「可能→可能性→許可」という文法化は普遍的なものではないことも分かる。次にヴォイス型であるが、可能は自発、受身と文法的な多義を示す。これも直線的な関係ではなく、放射状の関係になっている。最後に時間概念型であるが、可能は過去指向的な過去・完了、非限定的な時間表現である不完了相や習慣相と文法的多義を示している。

このように見ると可能と様々な概念の関係は直線的なものではなく可能を中心にして放射状に各概念が広がっていることが分かる。つまり可能がいわば中継基地としてモダリティ、ヴォイス、時間概念を取り結んでいるということである。これまで可能構文の研究は、一方では、もっぱらモダリティの一部として分析されて来た。これは欧米の分析に顕著である。他方では、他の概念との関連を考慮に入れず可能そのもの中で自己完結した形で研究されて来た。これは日本国内の可能研究に特徴的に見られる。しかしいずれのアプローチを取るにしても可能はモダリティ等の大きな文法概念のどれか一つに収まるものでなく、可能構文のみを見ていても可能構文の本質は分からないということである。可能は極めて複合的な文法概念であることを前提に研究を進めなければならないことを図 3 は示している。

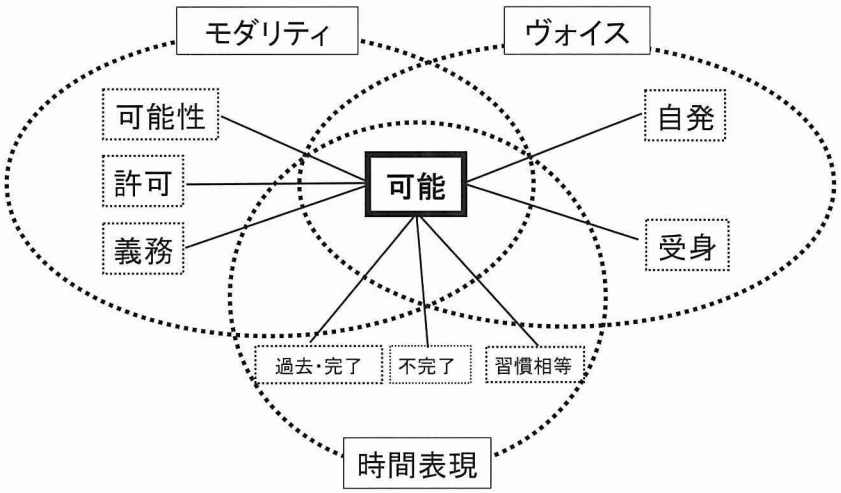

図3：可能を中心とする多義性のネットワーク

5. 動機付け

ここまでは可能構文がどのような文法概念と文法的多義性を示すのかを見て来た。本節では可能とそれぞれの文法範疇との多義の動機を考える。これを考察することで可能構文の多面性をさらに深く考えることにする。

5.1 モダリティ型

まず始めにモダリティ型との動機付けを考えることにする。可能といえばモダリティとすぐに連想されるほど欧米の言語学では可能はモダリティの一員であるということが暗黙の前提になっているように思われる。その結果、なぜ可能はモダリティの一員であるのかという本質的な問がなされていないまま分析が進んでいるように見受けられる。

基本的にモダリティは Fillmore[53] の定式化以来有名であるが、命題内容に対する話者の態度・判断等を表す。一般的に認められているモダリティは、発話された命題内容に対する話者の態度（不確定性、定性、可能性等）や、義務や許可といった deontic modality、認識や推論に関する epistemic modality 等があるが、可能は一見するとこれらのどこにも属さない。可能という概念の意味的な側面の一部には潜在性が潜んでいる。つまり、可能はある条件が満たされれば、その条件が常に発現するという潜在性を秘めているという概念化を前提として話者が発話するものである。そこには話者の判断が如実に含まれており、この話者の判断が極めてモダリティと親和性が高い。

可能には話者の判断が含まれているという議論を支持する証拠としては、可能構文を‘good’から文法化させているタヒチ語 (35) や Telelcingo Nahuatl 語 (36) の存在があげられる。‘good’は客観的な事態を述べる形容詞ではなく、話者がある事態に対して望ましいという判断を表す主観的な形容詞である。この話者の判断がとりもなおさずモダリティの一部であるということは言うまでもない。

(35) Tahitian（Tyron[25] : 98）

'e nehenehe tā'u 'e pa'uma 'i ni'a 'i tēra tumu rā'au.
it.is good my ART climb.up on LOC that tree
“I can clime that tree.”

(36) Telelcingo Nahuatl（Tuggy[54] : 110）

Kwalı nı-tlehku-s
good 1sg-ascend-FUT
“I can climb up.”

つまり可能が従来、暗黙裡にモダリティとして分析されて来た根拠の一つは、可能には話者の判断という側面があるということである。これがとりもなおさずモダリティの特徴の一つであるので、可能構文がモダリティとして分析されて来た事は十分に動機づけられていると言える。

5.2 ヴォイス型

次にヴォイス型との動機付けを考えることにする。4.2 節では大きく 3 パターンを示したが、事実を仔細に観察するとさらに細かく分けることができる。ヴォイス型は大きく分けて、自発が関与するタイプと関与しないタイプに分けられる。前者はさらに否定文脈が関与するタイプと関与しないタイプに分けられる。否定文脈が関与するタイプはさらに「受身→自発→可能」と文法化したと仮定できる南アジアタイプと、自発から受身と可能の両方が発達したと考えられる東アジアタイプに分けられる。否定文脈が関係しない自発から可能が派生したと考えられるタイプはオーストロネシア系の言語に見られる。自発が関与しないタイプは語彙的なもので、受身と可能が‘get, acquire, obtain’に相当する単語から派生したと考えられるタイプである。ベトナム語と英語がこれに相当する。ここまでをまとめると図 4 のようになる。この図からは結合価が変化する受身は否定文脈が関与し、受身が関与しないパターンと語彙的な派生は否定文脈が関与しないことがわかる。

先に議論が複雑になるのを避けるために Hindi 語等の南アジアの言語は「受身→可能」型であると述べたが、実際は Urdu 語 (37) や Marathi 語 (38) のように受身を表す形式の‘jaa-’（‘to go’）は自発も表すこともある。

(37) Urdu 語（Schmidt[55] : 331）

ōhō, mujh sē kyā hō ga-y-ā?
alas, I-obl. from what be go-PFV-m.sg
“Oh, no what have I done (involuntarily)?”

(38) Marathi（Pandharipande[56] :712）

to he boluun gelaa
he this said went
“He said this inadvertently”

そうすると、自発と否定文脈が関与する IA 型と IB 型は Shibatani[27] の説明がそのまま当てはまる。つまり、自発イベントは動作主の意図に関わらず、イベントが生じる（柴谷[57] : 168）のであり、“An event that occurs spontaneously has a strong propensity to happen. If this automatic happening is negated, then a reading of impotentiality is implied.”（Shibatani[27] :

自発	否定文脈	派生	言語	
関与	関与	受身→自発→可能	Hindi/Urdu, Marathi	IA
		自発→受身・可能	日本語、韓国語	IB
	関与なし	自発→可能	タガログ語, インドネシア語	IC
関与なし		'get' →受身・可能	ベトナム語, 英語	II

図4：ヴォイス型の可能の文法化による下位パターン

839)。つまり自発の否定で不可能が含意され、その否定がとれて可能の読みが生じたということである。

ただ、ここで議論をしなければならないことは、インド・アーリヤ語派に見られるようになぜ受身にした時に自発の意味が出るかである[58]。受身にすることで動作主が脱焦点化（de-focus）され、イベントの動作主があまり関係しないイベントが生じる。これは自動詞が受身になったときが顕著である。つまり自動詞は項が一つしかないので受身にするとイベントに関与する参与者がいなくなるからである。この時もっぱらイベントのみが前景化されたイベント主体の概念化が生じる。このイベント主体で概念化されたイベントは自発イベントに概念的に近い。なぜなら両方のイベントは動作主が欠けており、にも関わらずそこに関連するイベントが外部の力（つまり動作主）の存在なしで自然に生じることを含意する。つまり受身にして項を減らすことは自発イベントの解釈を誘発しやすいのである。この点でインド・アーリア系の言語は自発に近いイベント構造を発達させたと考えられる。その後の展開は Shibatani[27] の説明の通りである。

次に IC 型を考える。このタイプは否定文脈が関与しないので、上記の説明は成立しない。自発イベントは "a strong propensity to happen"（Shibatani[27]：839）を持っている。人間には事態を解釈する際に、たとえそこに動作主がなくても動作主がどこかにあるという解釈をする傾向がある。この傾向は特に英語に顕著であるように思われる（例えば池上[59]）。この 'cause-result' という使役のネットワークに自発イベントの特徴を当てはめると自発イベントでありながら、なんらかの動作主があるかのような解釈をすることになる。この解釈が強まると自発イベントに動作主がいわば外付けされた形で導入されることになる。自発イベントは動作主不在であっても "a strong propensity to happen" という特徴があるので、この特徴と動作主が合わさると潜在的な使役イベントが生じる。この潜在的な使役イベントは 3 節で提示した可能の意味構造と非常に相性がよい。つまり自発イベントが 'pent-up potency' に再解釈され何らかの動作主が 'factor' と再解釈される。その結果、可能の解釈が生まれることになる。

最後に II 型を考える。入手を表す動詞（'get' に意味的に対応する動詞）から派生した場合である。ここでは議論の関係上可能の文法化のみに話しを絞ることにする。(20b) のような例では「ベトナム語を話す」という事態を「得た」とも解釈できる。そういう事態を「得た」のであれば当然その事態が「できる」「可能である」という含意が生じるので、そこから自然に可能の意味が生じたと考えられる。興味深いのは 'get' に対応する語彙が文法化して可能を表す言語は同じ東南アジアにもカンボジア語、タイ語、ラオス語等に見られるが、どの言語も受身の用法がなく、ベトナム語のみが受身の用法を併せ持つということである。

5.3 時間概念型

最後に時間概念型との動機付けを考えることにする。まずここからの議論に関係する可能文の特徴から始めたい。可能文の意味には二つの側面がある。潜在的な側面と現実化・達成した側面である。

(39) He can run 100m in 9 seconds.

という文では「彼には 100m を 9 秒で走るという潜在的な能力がある」ということを述べている。この場合、能力は潜在的なものなので彼が寝ているときでもテレビを見ているときでもこの文は真となる。これとは逆に、

(40) He was able to run 100m in 9 seconds.

という文では「彼は 100m を 9 秒で走る能力があり、実際その能力を発揮し、100m を 9 秒で走る事態を実現させた」ということを述べている。3 節で示した可能の意味構造に照らし合わせれば、Factor（走る能力）が pent-up potency に働きかけ、result（9 秒で走る）

を出したということである。そうすると、この文も意味構造に合致するので可能を表していると考えることができる。潜在的な可能文は意味構造中の pent-up potency が前景化され、達成・実現的な可能文は意味構造中の result がそれぞれ前景化されたものと考えられる[60]。

可能文の潜在的な意味と達成的な意味のもう一つの側面は特定の時間（多くは過去時）との関係である。潜在的な可能文は文の命題内容の妥当性が特定の時間に限定されていない。これは可能文は習慣相に似ていて、特定の時間につなぎ止め（anchor）られていないということである。これとは対照的に達成的な可能文は文の命題内容が特定の時間に限定される。つまり特定の時間に anchor されているということである。ただし基本的には達成するにはその潜在的な力があったという前提は含意されるので、通常の過去時制の文とは違う。つまり、潜在的な可能文は意味構造の pent-up potency が前景化され、特定の時間に anchor されない習慣相に似た意味内容を持ち、達成的な可能文は意味構造の result が前景化され、特定の時間に anchor されているということである。

この特定の時間に anchor されているという事実がさらに前景化され、潜在性と言う側面が背景化されると（意味構造で言えば result がさらに前景化されると、結果は実現・達成を含意するので）ほぼ過去・完了の意味になる。このような意味で可能が完了を表す様になったと考えられる。

このことを具体的に示しているのは古代中国語の「得」の発達である。「得」は古代中国語の時代は (41a) にあるように可能を意味していた。この「得」は王他編（[61]：75）が (41b) を挙げ「表示完成」と述べているように、唐の頃に完了の意味が出て来た[62]。

(41) a. 遂斥晋軍、楚**得**以強　説苑（前漢代の説話集）
「ついに晋の軍隊を斥け、楚の国はそれがために強くなることができた」
b. 醫**得**眼前瘡，剜卻心頭肉。（聶夷中（837 年～884 年）「詠田家」
「医者は眼前の傷を癒したが、心頭の肉をえぐってしまった（ようである）」

次に、ビルマ語や Koiari 語等に見られる習慣相と可能との多義を考える。習慣的な行為とは、ある期間に渡って規則的あるいは定期的に行われる行為であり、それは発話時より前の過去のある時に始まり、発話時の前後にも定期的に行われており、当座の未来へも継続することが含意される行為であると考えられる。この習慣的な行為の特徴はどこか特定の時間に結びつけられている訳ではなく、いつ発話をしてもその文で表される行為の妥当性が保証されるものであり、この点で総称文に似ている。先に可能文には潜在的な側面と現実化した・達成した側面があると述べたが、可能文の潜在的な側面は習慣相の文と同様に可能文の表す命題内容がある特定の時間に結びつけられておらず、その妥当性が常に保証されている。この点が可能文と習慣相の類似点である[63]。こういった類似点があるので習慣相が可能を表すことは十分に動機づけられていると考えられる[64]。

このように考えるとトルコ語の超越時制が可能を表すことも自然に説明できる。習慣が個人レベルで繰り返し起こる事象であるとすれば、超越時制で表される真理とは人類レベルで繰り返し起こる事象である。つまり、習慣と真理はどのレベルで事象の抽象化を行うのかの違いであって、本質的にその意味内容は変わらない。それ故に超越時制が可能を表すのは自然である。

最後にロシア語やポーランド語等のスラブ系の言語に見られる不完了相が可能を表す場合を考える。不完了相も基本的には習慣相や真理と同様にある特定の発話時に結びつけられずに文が表す命題内容の妥当性が保証されている。つまり、可能文の潜在的な側面と非常によく似ており、この点で不完了相が可能を表すことは自然であり、動機づけられていると考えられる。

6. ま と め

本論文では従来見られたモダリティ中心の可能観を一度離れ、可能構文がどのような文法範疇と文法的多義をなすかを示し、その背後にある認知・機能的な動機付けを考察した。可能は、モダリティ型、ヴォイス型、時間概念型と大きく 3 つに分けられる。モダリティ型の可能は可能性、許可、義務と文法的多義を示し、ヴォイス型の可能は自発、受身と文法的多義を示し、時間概念型の可能は過去・完了、不完了相、習慣相、超越時制等と文法的多義を示すことをそれぞれ示した。それらの相関図が図 3 である。

このように可能構文は 3 つの大きな文法範疇と結びついている複合的な文法範疇である。つまり、可能は人称や数などと言った基本的に他の文法範疇として範疇化される可能性が殆どないと考えられる文法範疇とは違い、様々な側面から言語化される文法概念であると言える。これは可能という概念がある言語において具現化される際に、どの文法範疇から可能を文法化させて行くかということは最初から決まっている訳ではなく、その言語の内的要請に応じて様々な可能性の中からその言語特有の可能構文を発達させて行くと考えられる。図式的に考えれば、図 5 のように、可能という概念は多面的な解釈が可能な概念であり、どの

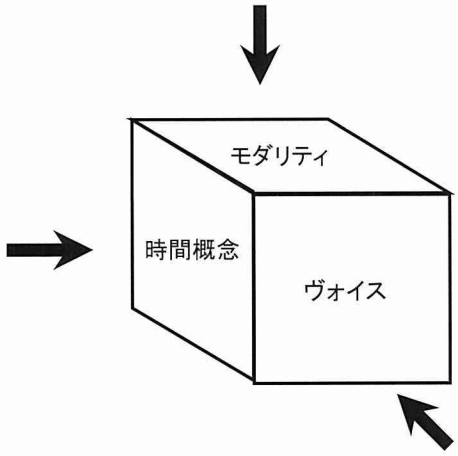

図5

位置から見るかに応じて可能の見え方が違うということである。例えば、上から見ればモダリティ型に、前から見ればアスペクト型に、横から見ればヴォイス型として見えるということである。

この可能の多面的な側面が含意することは、従来ある枠内（例えば、モダリティやヴォイス）で研究されて来た概念（義務、可能等）は実は様々な側面からなる複合的な概念ではないのかという疑問である。これを示唆する現象は例えば自発（ヴォイス）という概念が証拠性（モダリティ）で表されることがある一連の言語（Curnow[65]）や格の交替で自発や可能を表しうるシンハラ語等にある。本論文が示唆することは、どの文法概念もそれが伝統的に分析されて来た枠を一度離れて、どのような文法範疇と多義を示すかを考え、その多義性にどのような規則性や方向性が見られるかという文法範疇間の多義性という研究領域である。もちろん、これは今後の研究課題である。

参考文献と注

1. Palmer, F. R. 2001. *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge UP.
2. Bybee, J. et. al. 1994. *The Evolution of Grammar*. Chicago: Chicago University Press.
3. van der Auwera Johan, Plungian Vladimir A. 1998. "Modality's semantic map." Linguistic Typology 2: 79-124.
4. Leech, G.. 2004. *Meaning and the English Verb*. (3rd ed.) Longman.
5. Collins, P. 2008. *Modals And Quasi-modals In English*. Rodopi Bv Editions
6. 小西友七 . 1980.『英語基本動詞辞典』東京：研究社
7. Sweetser, E., 1990, *From etymology to pragmatics*. Cambridge, Cambridge University.
8. 澤田治美 . 2006.『モダリティ』東京：開拓社 .
9. Quirk et al., 1985. *A Comprehensive. Grammar of the English Language*. Longman.
10. Huddleston, R.and G. K. Geoffrey. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
11. Biber et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman
12. 尾上圭介（1998）「文法を考える 5~6 －出来文（1）～（2）」『日本語学』17 巻 7 号、10 号
13. 尾上圭介（1999）「文法を考える 7 －出来文（3）」『日本語学』18 巻 1 号
14. 川村大 . 2004.「受身・自発・可能・尊敬 - 動詞ラレル形の世界 -」『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』朝倉書店 . 105-127.
15. 小矢野哲夫 . 1979.「現代日本語可能表現の意味と用法（Ⅰ）」『大阪外国語大学学報』第 45 号 .
16. 小矢野哲夫 . 1980.「現代日本語可能表現の意味と用法（Ⅱ）」『大阪外国語大学学報』第 48 号 .
17. 小矢野哲夫 . 1981.「現代日本語可能表現の意味と用法（Ⅲ）」『大阪外国語大学学報』第 54 号 .
18. 渋谷勝己. 1993. 日本語可能表現の諸相と発展、『大阪大学文学部紀要第 33 巻 第 1 分冊』
19. 渋谷勝己 . 2002.「可能」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』7-27.
20. 寺村秀夫 . 1992. 日本語のシンタクスと意味（第 1 巻）. くろしお出版 .
21. 張玉金 2001.『甲骨文語法学』上海：学林出版社 .
22. Foley, W. 1991. *The Yimas Language of New Guinea*. Stanford University Press.
23. 相原茂 . 2002.『はじめての中国語学習辞典』東京：朝日出版社 .
24. Schmidt. 2007. "Urdu" in G. Cardona and D. Jain (eds.) *Indo-Aryan Languages*. Routledge.
25. Tyron. 1970. *Conversational Tahitian*. Australian National University Press.
26. Shibatani, M. 2006. "On the conceptual framework for voice phenomena." *Linguistics* 44.2: 217-270.
27. Shibatani, M. 1985. "Passive and related constructions: A prototype analysis" . *Language* 61.4: 821-848.
28. Comrie, B. 1982. *Language Universals and Linguistic Typology*. Basil: Blackwell Publishers.
29. Talmy, L. 2003. *Toward a Cognitive Semantics: vol. 1/2*. Cambridge, MA: MIT Press.
30. Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar. vol. 1*. Stanford: Stanford UP.
31. Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar. vol. 2*. Stanford: Stanford UP.
32. Le-Ba-Khanh. 1991. *Vietnamese-English/English-Vietnamese Dixtionary*. New York: Hippocrene Books.
33. 冨田健次 . 1988.『ベトナム語の基礎知識』東京：大学書林 .
34. Beijing wai guo yu xue yuan. "Han Ying ci dian" bian xie zu. 1990 Han ying ci dian (A Chinese-English dictionary.) Peking : Shang

wu yin shu guan.
35. 守屋宏則 . 1995.『やさしくくわしい中国語文法の基礎』東京：東方書店 .
36. 加藤昌彦 . 2004.『CD エクスプレスビルマ語』東京：白水社 .
37. Raija et al. 2000. *Suomi-englanti-suomi sanakirja*. Helsinki: Werner Söderström Osakeyhtiö.
38. Lee, Keedong. 1993. *A Korean Grammar: on Semantic-pragmatic Principles*. Seoul: Hanguk Munhwasa.
39. Kachru, Yamuna. 2006. *Hindi*. Amsterdam : John Benjamins Pub. Co.
40. Doctor, Raimond. 2004. *A Grammar of Gujarati*. Lincom Europe.
41. Osada, Toshiki. 1992. *A Reference Grammar of Mundari*. Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
42. (24b) の 'nakata-' は 'maka-' の重複形で、語頭が m から n へ変わることで、完了相を表している。
43. 大上正直 . 1994.『フィリピノ語文法入門』東京：白水社 .
44. 牛江清名 . 1975.『インドネシア語の入門』東京：白水社 .
45. Dutton, Thomas Edward. 1996. Koiari. München : Lincom Europa.
46. Seiler, Walter. 1985. Imonda. a Papuan Language. Pacific Linguistics.
47. 勝田茂 . 1986.『トルコ語文法読本』東京：大学書林 .
48. 藤沼貴編 . 2000.『研究社和露辞典』東京：研究社 .
49. 塚本桂子 . 2008.『よくわかる現代ポーランド語文法』東京：南雲堂フェニックス .
50. Jacob, M., 1974. *A concise Cambodian-English dictionary.* London, New York,: Oxford University Press.
51. Haas, M. 1964. *Thai -English Student's Dictionary*. Stanford University Press.
52. 山田均 . 1996.『キーワードで覚える！やさしいタイ語会話』ユニコム .
53. Fillmore. CJ 1968. "The case for case." In E. Bach and RT Harms (eds) . Universals in linguistic theory. New York. 1-88.
54. Tuggy, D. 1979. "Tetelcingo Náhuatl." In Ronald W. Langacker (ed .) , Studies in Uto-Aztecan grammar 2: Modern Aztec grammatical sketches, 1-140. Summer Institute of Linguistics Publications in Linguistics.
55. Schmidt. 2007. "Urdu" in G. Cardona and D. Jain (eds.) *Indo-Aryan Languages.* Routledge.
56. Pandharipande. 2003. "Marathi" in G. Cardona and D. Jain (eds.) *Indo-Aryan Languages*. Routledge.
57. 柴谷方良 . 2000. ヴォイス .『日本語の文法 1 －文の骨格』東京：岩波書店 .
58. 日本語のラレルは自発が起源であり、そこから可能・受身等の様々な意味が生じたとする議論が主流であるので、この疑問は生じない。
59. 池上嘉彦 . 1981.『「する」と「なる」の言語学』東京：大修館書店 .
60. 達成的な側面が前景化された可能文を「意図成就」(尾上 [12,13]、川村 [14])、'actualized meaning' (van der Auwera and Plugnigan [3]) と呼び、別の意味とする研究者もいる。本文から分かるように両方の意味は基本的な意味構造は同じであり、ただ意味構造のどの部分を前景化するかの違いである。
61. 王他編 . 2005.『古漢語常用字字典第 4 版』北京：商務印書館 .
62. ただ、現代中国語の辞典である小学館『中日辞典』(1992: 301) によれば「初期の白話に多い」とあり、同じ現代中国語の辞典である香坂 [66]：167) では「多く旧白（話語彙)、又は方(言)」と述べられている。そして両辞典とも例として同じ (i) をあげている。すると方言には残るものの現在の標準語には残っていないと考えて差し支えないようである。
i) 出得門来（門を出て来た）小学館『中日辞典』1992: 301)
63. 可能文は「彼は 100m を 9 秒で走れる」のような極端な場合 1 回の事象で成立するが、習慣相はある一定の期間に渡り同じ行為が繰り返されないと文が成立しない。
64. 文法化の方向性に関しては通時的なデータがないので、現在の段階では確たることは言えない。
65. Curnow, T. 2003. "Nonvolituonality expressed through evifentials." *Studies in Language* 27-1: 39-59.
66. 香坂順一編 . 1986.『簡約現代中国語辞典』東京：光生館 .